

Market Watching

市場レポート

テーマ: Weekly Market Report (2005年5月30日 ~)
~ 市場は強めの材料に反応しやすくなってこよう ~

発表日: 2005年5月30日 (月)
(No.MW - 9)

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 鷹峰 義清 (03-5221-4521)

今週のスケジュール

今週の経済指標・イベント・注目材料

| 発表日 | 国 | 指標・イベント | 注目度 | コンセンサス | レンジ | 前回 | 備考 |
|----------|--------------|-------------------|------|------------|-------------|-------|--------|
| 5月30日(月) | 日本 | 鉱工業生産(4月) | | +2.0% | 0.9~+3.0% | 0.2% | 前月比 |
| | 米国 | メモリアルデーの祝日で休場 | | | | | |
| | 欧州 | 英国・バンクホリデーの祝日で休場 | | | | | |
| 5月31日(火) | 日本 | 家計調査(勤労者・4月) | | 3.7% | 5.8~+0.5% | +1.7% | 前年比 |
| | | 失業率(4月) | | 4.5% | 4.4~4.7% | 4.5% | |
| | | 住宅着工(4月) | | 116.6 | 108.7~118.6 | 116.6 | 万戸・年率 |
| | 欧州 | 欧消費者物価(5月) | | 2.0% | 1.9~2.2% | 2.1% | 前年比 |
| | | 独失業率(4月) | | 11.8% | 11.6~12.0% | 11.8% | |
| | | 英GfK消費者信頼感(5月) | | 1 | 2~+3 | 0 | |
| 米国 | シカゴ地区PMI(5月) | | 62.0 | 56.0~65.6 | 65.6 | | |
| | 消費者信頼感(5月) | | 96.1 | 93.5~100.0 | 97.7 | | |
| 6月1日(水) | 米国 | ISM(製造業・5月) | | 52.5 | 48.5~54.0 | 53.3 | |
| | | 自動車販売台数(5月) | | 1,670 | 1,650~1,720 | 1,750 | 万台・年率 |
| | 欧州 | 欧製造業PMI(5月) | | 49.0 | 48.0~50.0 | 49.2 | |
| | | 欧失業率(4月) | | 8.9% | 8.8~9.0% | 8.9% | |
| 6月2日(木) | 日本 | 10年債入札 | | | | | |
| | 欧州 | ECB理事会 | | 据え置き | | | |
| | | 英ネーションワイド住宅価格(5月) | | +5.5% | +4.8~+7.3% | +7.0% | 前年比 |
| 6月3日(金) | 米国 | 雇用統計・非農業就業者数(5月) | | +180 | +139~+225 | 274 | 千人・前月差 |
| | | 失業率(5月) | | 5.2% | 5.1~5.3% | 5.2% | |
| | | 時間あたり賃金(5月) | | +0.2% | +0.1~+0.3% | +0.3% | 前月比 |
| | | ISM(非製造業・5月) | | 60.1 | 58.0~62.5 | 61.7 | |

(注) 市場コンセンサス、予測レンジは各種ベンダー調査に基づく
注目度は筆者

今週の注目点

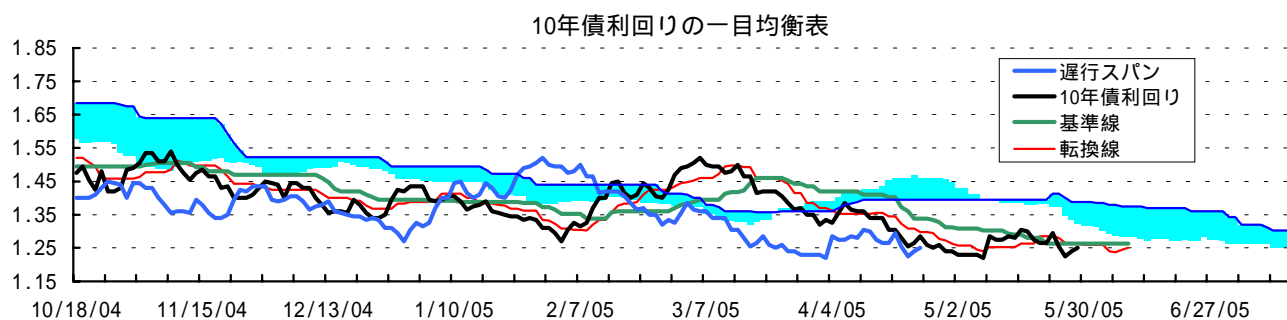
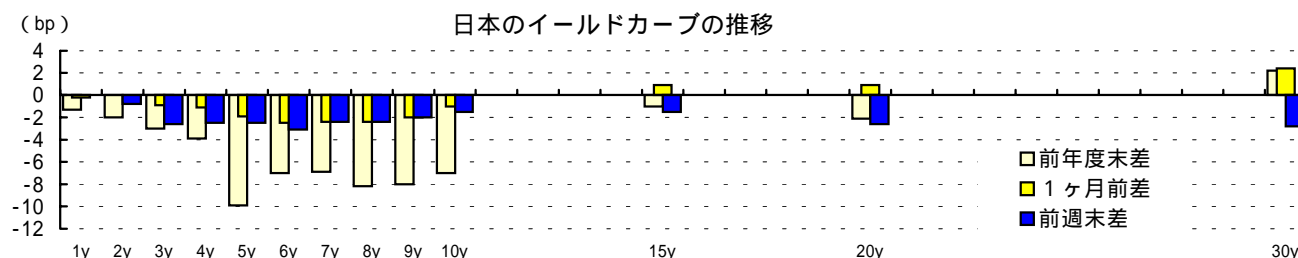
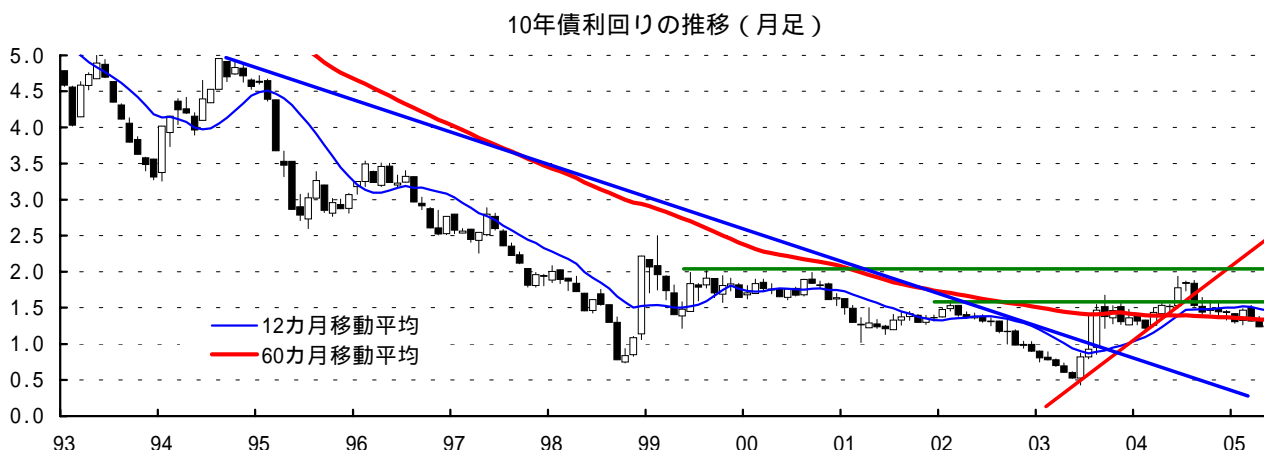
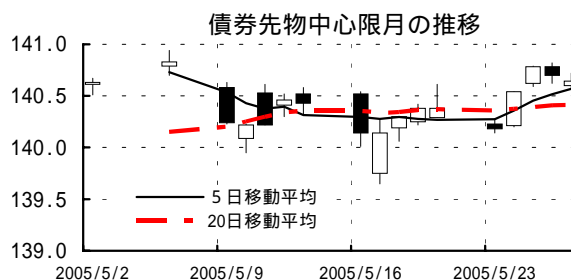
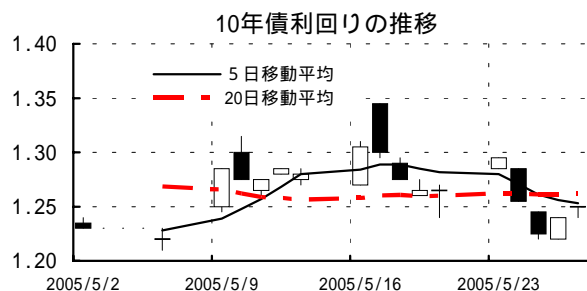
今週は日米ともに注目度の高い月次経済指標の発表が相次ぐ。特に週前半は鉱工業生産をはじめとした日本の経済指標、週後半はISMや雇用統計といった米国の経済指標が注目される。市場コンセンサスは強弱まちまちとなっており、全体として景気が強含む、あるいは弱含むことを明確に示唆するようなものとはならないと予想されている。

ただし、注目点はヘッドラインではなく、その中身であろう。日本の鉱工業生産では、電子部品デバイスの在庫調整が順調に進展しているか、ここへきて積み上がりが見られる非電子部品デバイスの在庫はどうなっているか、(と密接に絡むと考えられるが)先行きの生産予測指数はどうか、などの点が重要だ。米国のISMでは、未だ反転が見られない新規受注判断DIの動向が最大の注目点となる。

昨年から続いてきたハイテク部門での調整にはようやくめどがつき始めた一方、その他の分野でモメンタムの低下が著しくなっている。経済全体での占率は非ハイテク分野が圧倒的に高いため、足元の方が先行き不安は高まりやすい状況にある。このまま非ハイテク分野の調整が深まっていくようであれば、相対的に堅調さが目立つ個人消費への悪影響も強まってこよう。ただし、経済全体に占めるシェアは小さくても、ハイテク部門の動向はその先行性という点で重要な意味を持つ。米国の株式市場では、フィラデルフィア半導体株指数の上昇に見られるように、いち早くハイテク部門の回復を織り込み始めたようだ。市場は強めの材料に反応しやすくなりつつあり、経済指標が冴えないものとなっても、予想外に底堅い推移を見せると予想される。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

[国内金利]：経済指標強弱混在で低位安定

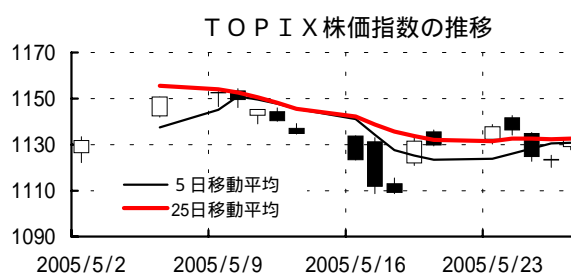
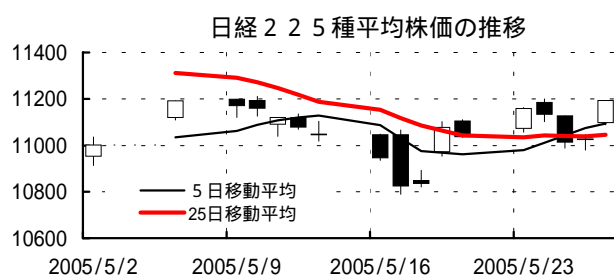
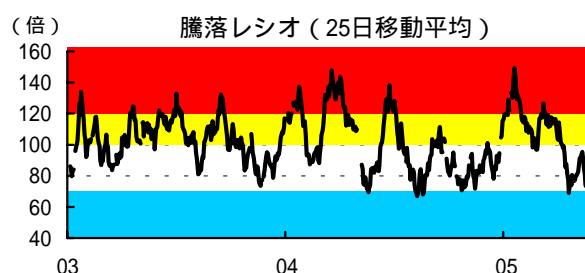
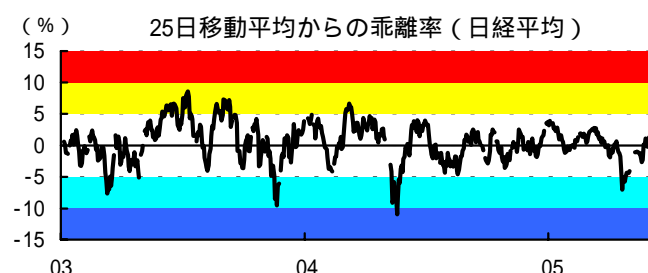
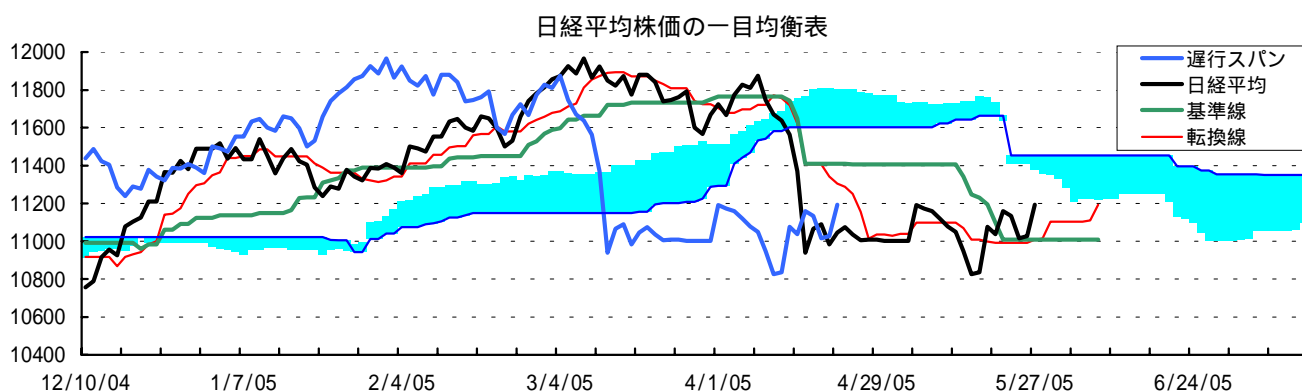
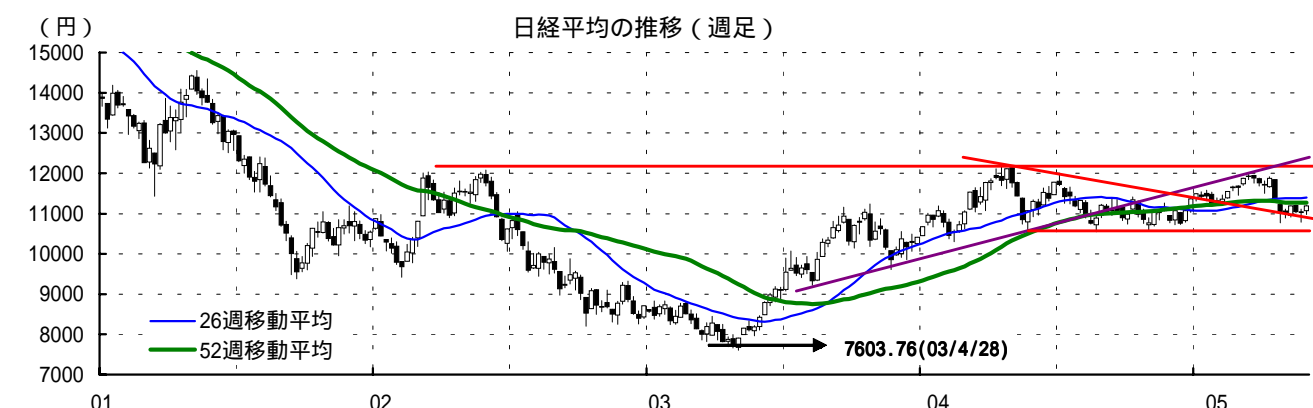


先週は、10年債利回りは前週末比 1.5bpの1.250%で越週した。手がかかり難の中、株価や米金利の動向に左右されながらも、方向感無くもみ合った。

今週は、週前半に主要月次経済指標の発表が相次ぐ。また、週後半には米国でISMや雇用統計の発表があるなど、材料が目白押しとなる。ただし、日米とも経済指標は強弱入り交じるとの見方がコンセンサスとなっている。現状では、日本の鉱工業生産、米国のISMともに循環的な浮揚感を示唆するような内容になるとは見込み難く、総じて金利は低水準でのみ合いとなる公算が大きい。ただし、米ハイテク株を中心に、先行き改善を織り込む格好で株価が上昇基調で推移する場合には、10年債利回りも1.3%近辺まで上昇する可能性はある。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

[国内株式]：動き取りにくいものの、総じて底堅い展開を予想



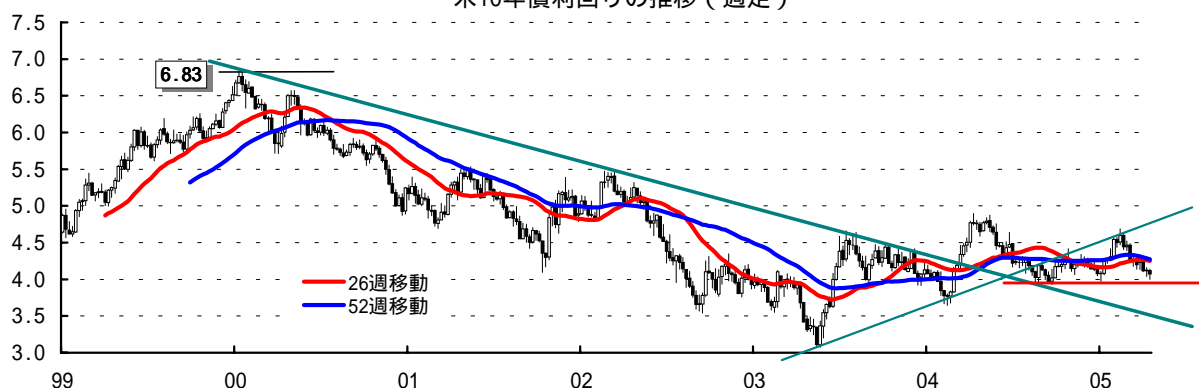
先週は、株価は前週末比上昇。日経平均は前週末比 +1.4%の11,192.33円、TOPIXは同 +0.2%の1,132.34ポイントで越週した。比較的方向感無く上下にぶれる展開となったが、週末には前週に外国人投資家が買い越しに転じたことが判明したことをきっかけに大きく上昇して越週した。

今週は、底堅い展開が予想される。日米とも経済指標の発表が続くが、強弱どちらかに傾くことはなさそう。週後半には米ISMや雇用統計が発表されることもあり、週前半の日本の主要月次統計だけでは積極的には動きにくい。ただし、こここのところ外国人投資家の売り越しにも歯止めがかかってきていることもあり、需給環境は徐々に好転している。米統計が余程崩れない限り、株価は総じて底堅く推移しよう。

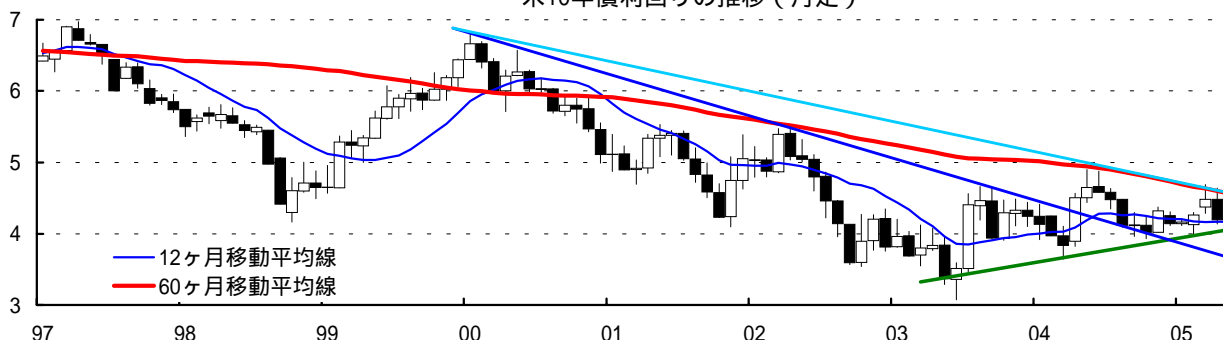
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

[米国金利] : 4%割れを促すほどの弱い材料は無い見込み

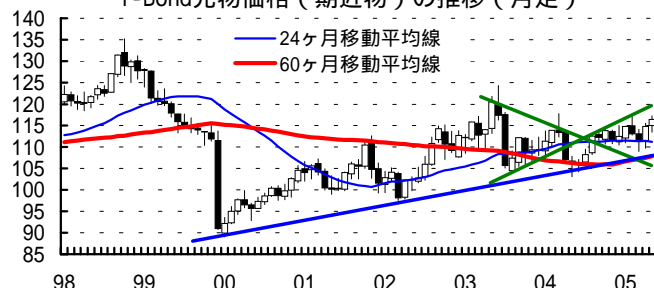
米10年債利回りの推移 (週足)



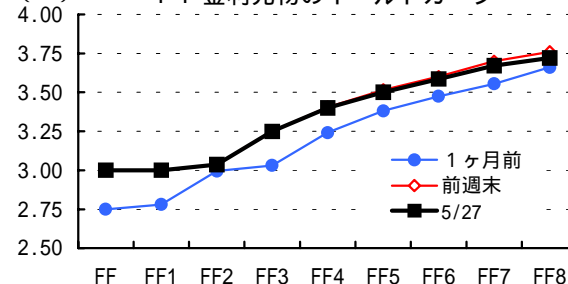
米10年債利回りの推移 (月足)



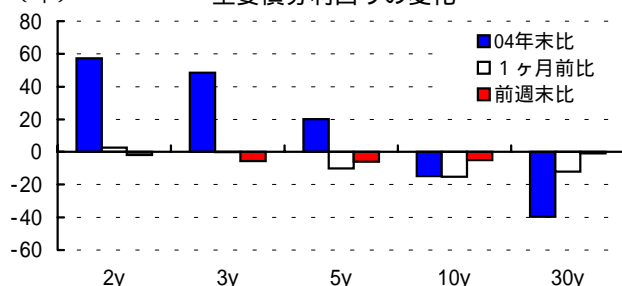
T-Bond先物価格 (期近物) の推移 (月足)



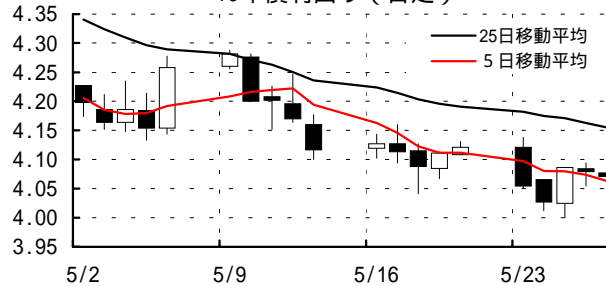
FF金利先物のイールドカーブ



主要債券利回りの変化



10年債利回り (日足)

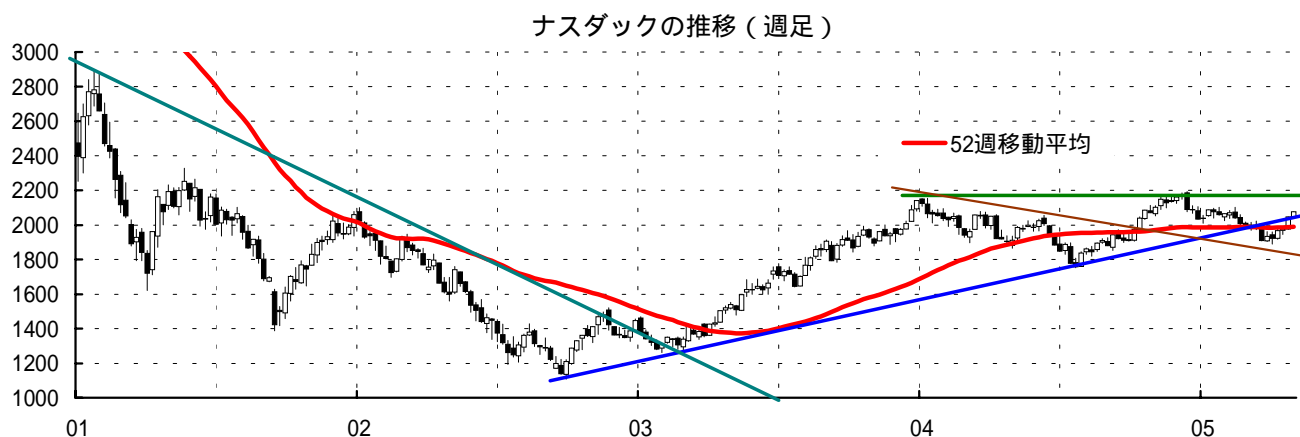
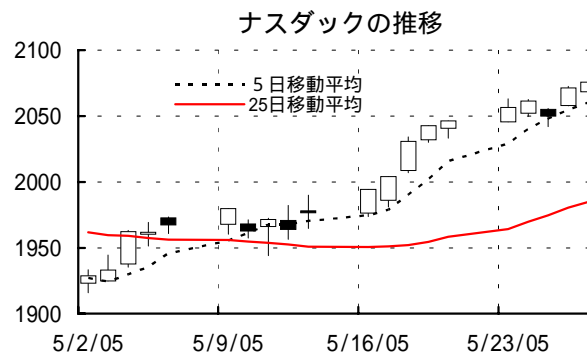
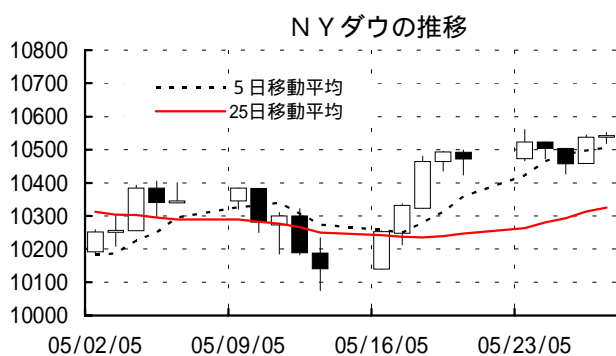


先週は、10年債利回りは前週末比 5.0bpの4.071%と低下した。週前半は物価低位安定を改めて好感する格好で低下余地を探る展開となり、一時4.00%をつけた。その後は地区連銀総裁によるややタカ派的な発言をきっかけに金利はやや上昇した。

今週は、ISMや雇用統計など多くの注目指標が発表されるなど、材料が多い。全体的には強弱混在する形となると予想されるが、金利の現在の水準が妥当なものとして評価されるかは微妙。やや金利強含みを予想。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

[米国株式] : 原油価格の展開次第で上下にぶれる可能性



先週は、株価は上昇。NYダウは前週末比+0.7%、ナスダックは同+1.4%となった。GDPの上方修正や、個人消費デフレーター（コア）の落ち着いた動き、金利の低下が株価上昇要因となる一方、原油価格の上昇が抑制要因となり、株価は小幅の上昇にとどまった。

今週は、ISMや雇用統計に注目が集まる。ただし、内容的にはまちまちとなる見込みで、株価への影響はほぼニュートラルか。春先に見られた景気やインフレに対する警戒的な見方は減っていることから、基本的には株価は堅調な展開が予想される。ただし、これを阻む要素となりうるのが原油価格の動向。チャートの的には、特にナスダックなど上昇余地が大きいと判断される。

[欧州金利・商品市況] : 原油の調整終了か

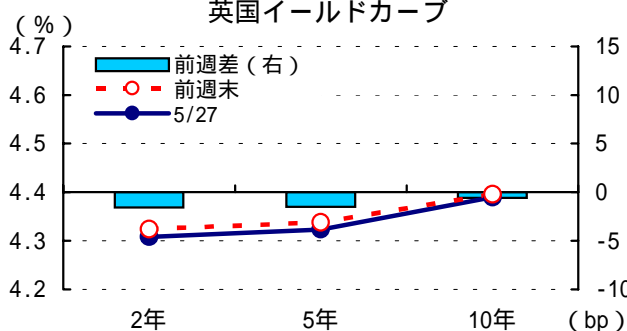
(%) イギリス10年債利回りの推移



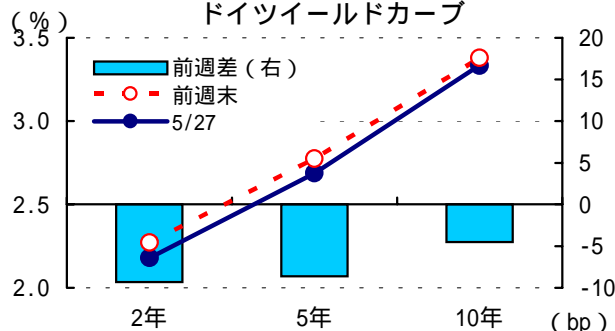
(%) ドイツ10年債利回りの推移



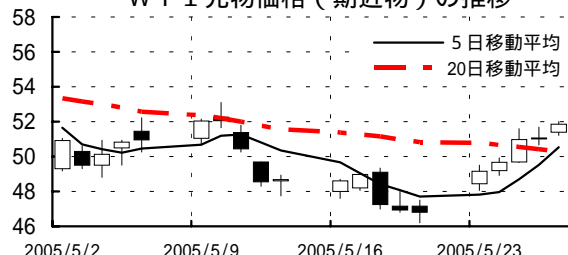
英国イールドカーブ



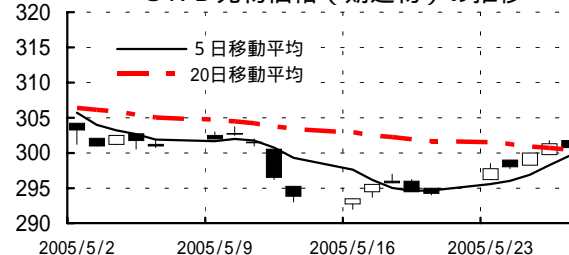
ドイツイールドカーブ



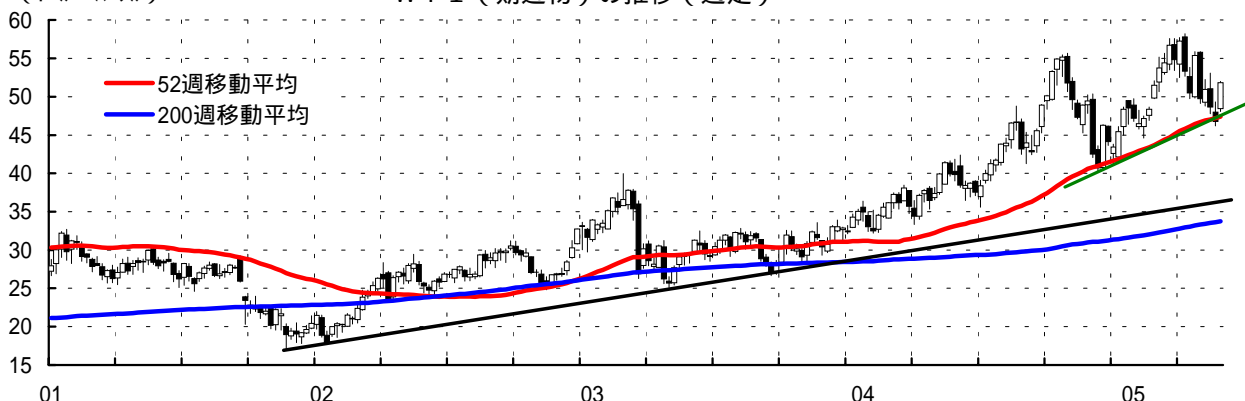
WT I 先物価格 (期近物) の推移



C R B 先物価格 (期近物) の推移



(ドル/バレル) WT I (期近物) の推移 (週足)

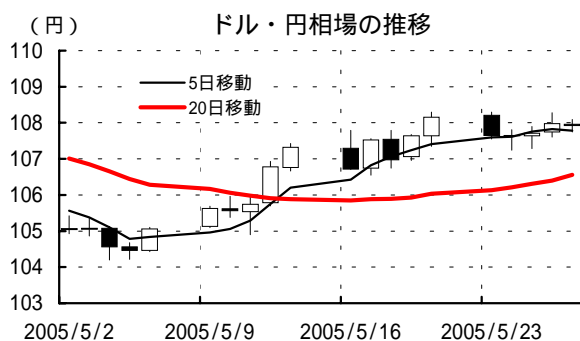
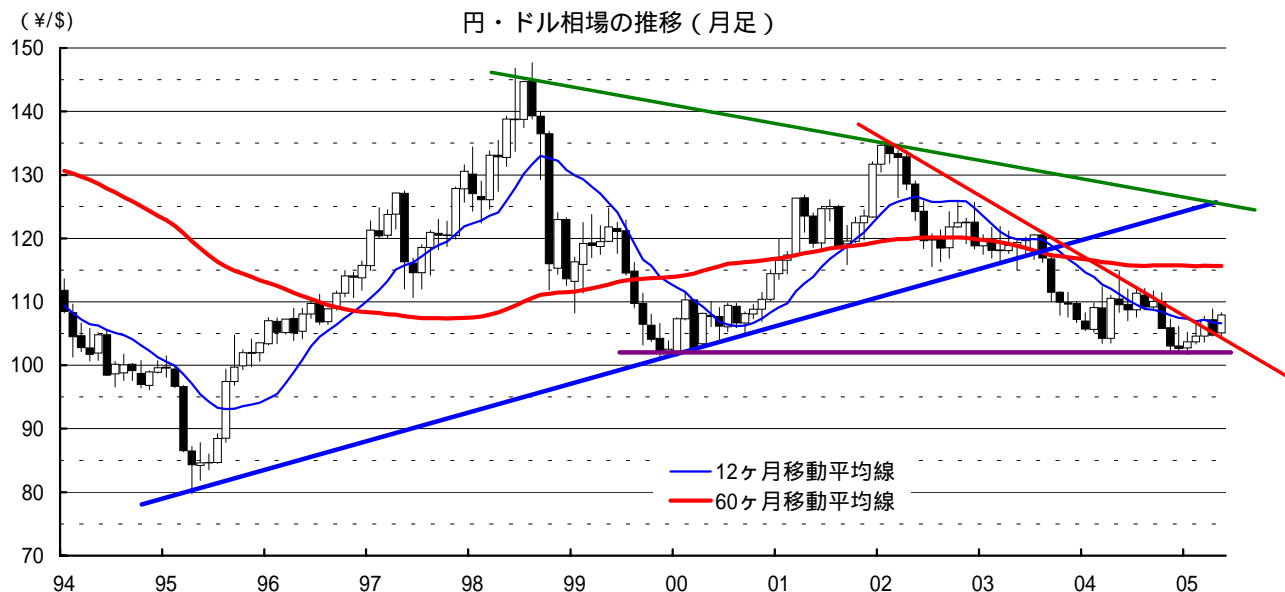


欧州金利は低下。Z E Wやi f oなど注目された景況指標がいずれも予想に反し悪化したことから、景気に対し慎重な見方が強まった。今週は、雇用、物価統計が注目されるが、いずれも金利上昇要因にはならないと予想される。ただし、米経済指標が予想以上になった場合は、米金利とともに上昇が予想される。

原油価格 (WT I、期先) は、前週末比+5.05ドルと上昇。原油在庫が予想外の減少となったことなどが背景。今週も引き続き週次在庫統計が注目されるが、一旦は下値をつけたとの見方から、底堅い展開が予想される。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

[外国為替] : ファンダメンタルズに決定力無く、ドル円は引き続きもみ合いか



先週は、ドル円、ユーロドル相場ともほぼ横ばい。ユーロは軟調な展開が続いたが、週末にはフランスの最新の世論調査をきっかけに、EU憲法が否決されるとの観測が後退し、買い戻される形となった。

今週は、フランス国民投票の結果次第で、ユーロはぶれる可能性がある。ファンダメンタルズ面では、日米とも経済指標の発表が多いが、強弱入り交じる内容になると予想され、相場の方向性を大きく変える要因にはなりにくい。ドル円相場は引き続き方向感無くもみ合う公算が大きい。